2008 年 7 月 28 日

太湖の汚染（その２）：ここにも多くの「癌症村」

無錫市は、太湖に跨るようにして、その北東側と南西側に広がっている地級市である。中国の行政区には、省級、地級、県級、郷級という 4 つの級があり、市には、前の 3 つに対応して、省級市、地級市、県級市の 3 種類がある。例えば、北京市や上海市は省級市であり、無錫市の南隣にある蘇州市は地級市であり、さらに前回紹介した環境保護活動家、呉立紅の住む宜興市は県級市で、無錫市の管轄下にある。

その無錫市に属する 10 以上の村が、住民の癌発生率が異常に高い、がん（癌）村（「癌症村」）である、と言われている。癌多発の原因はまだ特定されていないようであるが、因果関係のありそうなものとして、次のことが伝えられている —— 1. 太湖に流れ込む 10 の主な河のうち、少なくとも半数は汚染度が非常に高い。2. 太湖の「藍藻」が作り出す物質は、人体の中で癌を発症させる恐れがある。3. 米の二毛作のために、大量の化学肥料が使われてきた。4. 染色工場や化学工場が多いが、水処理設備を持つものは少ない。

これらのうち、4. については、次のような事情がある。すなわち、無錫市は、かつては「魚米の郷」として知られていたが、1978 年の「改革・開放」政策における主要対象地域の 1 つになった結果、中国でも有数の工業都市に変身した。しかし、その工業の特徴は化学工業の比重が大きいことにあり、太湖の西側には数百の小さい化学工場が散在している、あるいは、その周辺には約 2 万の化学工場がある、と言われていた。

ところで、中国全土に「癌症村」はどのくらいあるか。『産経』の福島香織記者は、中国メディアによると、淮河流域の河南省瀋丘県には、がん患者が異常に多い「癌症村」が 100 以上存在する、と伝えている（2007-6-20）。また、”Chemical & Engineering News”によると、癌発生率が中国全体の平均の 2 倍以上である「癌症村」が数百ある、という（2007-10-29）。これらの記述に見られる通り、そもそも「癌症村」について明確な定義はなされておらず、しかも、情報の出所により「癌症村」の数には大きな開きがある。

それは兎も角、「癌症村」という事実が、中国社会に対して、根の深い、深刻な問題を突き付けていることは、改めて強調するまでもない。筆者が「中国における炭鉱事故の現状と対策」（下）で述べたように、それは“共存する 2 つの中国”のうちの“隠された”方——外国人に向けて展示された方ではない——の中国の問題である。

ただし、報道の実情に即して言えば、「癌症村」は外国人に対しても“隠された”ものではない。Washington Post 紙によると、1974 年から陝西省竜嶺村で確認されていた「癌症村」現象は、2000 年に初めて西安市発行の小新聞で採り上げられ、その後、『北京青年報』の報道を経て、2001 年 5 月、新華社の指導者向け内部資料によって、副首相だった温家宝の知るところとなり、温は国家環境保護総局に調査を命じたが、調査結果は村人には知らされなかった（2001-11-5）。一方、駐北京アメリカ大使館の情報（2001-6-15）は、人民日報が 2001 年 6 月初め、この件につき、1974 年からの癌による死亡の状況、可能性のある原因物質などを報じた、と述べている。

（エイジアム研究所　上席研究員　　木村　徹）

Asiam Research Institute　　http://www.asiam.co.jp/